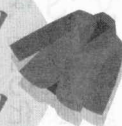


スーツ
の
ルーツ

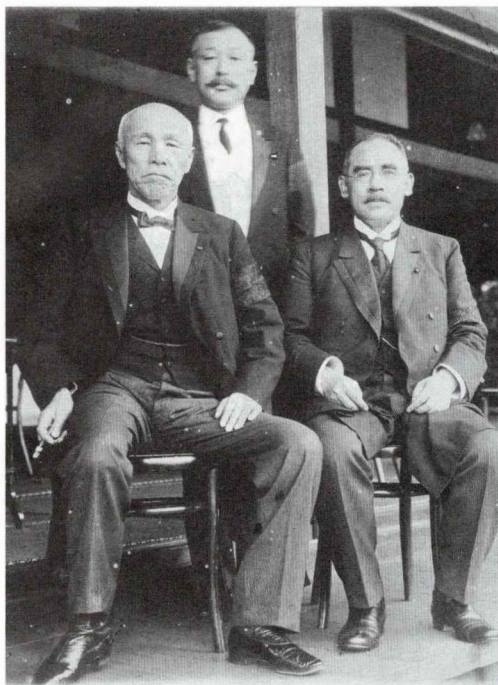


不要な部分を残すのは 伝統への敬意のしるし

服飾史家

なか の か おり
中野香織

1962年、富山県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学。明治大学特任教授などを経て、著述・講演・企業アドバイザーに携わる。著書に『スーツの神話』（文春新書）など。



フロックコートに身を包む大隈重信＝左端
(写真提供：共同通信社)

指令によって導入

大隈重信や板垣退助や伊藤博文など、明治期の政治家の写真や銅像を見ると、着物姿と洋服姿とがあり、明治維新後の文明開化の流れのなかで、和装から洋装へと移り変わっていったことが分かります。しかし、こうした洋服は当時、「えびす服」などと呼ばれており、すんなりと取り入れられたわけではありませんでした。明治4年、宮中西の丸大広間において、服制に関する一大評定なるものが行われ、洋服の採用について議論がされています。

「洋服が便利かどうかなどは末葉の論議である。昔、趙の武靈王が胡の国を征服するに胡服を用い大勝した、という故事がある。この例に従ってこの際、世界的な服装を用いるべきである」

外務卿の発言を受け、それまで黙っていた西郷隆盛参議が、「うむ。いかにも胡服してえびすを征すとの副島どんと同じ意見でござす」と発言し、ただちに洋服の採用が決まったといえます。以降、政府・皇室関係者の礼服および、郵便や鉄道職員などの制服から、洋装が導入されていきました。

一般大衆までが洋服化するのには、二度の世界大戦を経た後のこととなりますが、日本男性の、洋装受容の歴史において特徴的なのは、「上からの指令によって進められたものである」ということです。

誰かが「正しい」と決めた服を、ただ着続けてきたのだとしたら、現代の日本人がスーツについてほとんど何も知らないのは、ある意味で当然なのかもしれません。今も日本で、誠実さをアピールするようなとき、誰に強制された

長い尾を切り取る

わけでもないのに、大半の男性が迷わずスーツに身を包んで現われるのは、この洋装受容の経緯に、根っこがあるのではないのでしょうか。

でもなぜ、あの組み合わせで、あんな形なのか。改めて考えてみると不思議ですよね。そこには、私たちが知らない歴史が深く関わっています。詳しくお伝えしたいのですが、とても書き切れないでしょうから、おまかな流れだけをご紹介しますいただきます。

1666年の10月に、宮廷の貴族が華美な衣装をやめて、儉約姿勢を庶民に示すため、時のイギリス国王チャールズ二世によって、衣服改革宣言なるものが出されました。

この際、採用されたのが、「上着＋ズボン＋ベスト＋シャツ＋タイ」で構成された衣装で、見た目こそ、今のスーツとはまだ大きく異なりますが、現代へとつながる構成要素を作ったという意味で、スーツの元祖とされています。その後、イギリスで産業革

命が起こり、縫製技術も発達しはじめた19世紀初期、それまで正式とされてきた、刺しゅうの施された宮廷服とは一線を画する、今のスーツの原型となる服が誕生します。

土台となったのは、田園地帯に広大な土地屋敷を所有するカントリージェントルマンと呼ばれる人々が、乗馬などをするときに野外で着たフロック・コートという上着です。宮廷服に比べると随分と動きやすい、ウールでできたテイラードの服ですが、これがタウン仕様に洗練されていき、やがて、スタンダードな男の上着になっていきます。最初にお話した明治期の政治家らが着ているのは、ほとんどがこのフロック・コートです。

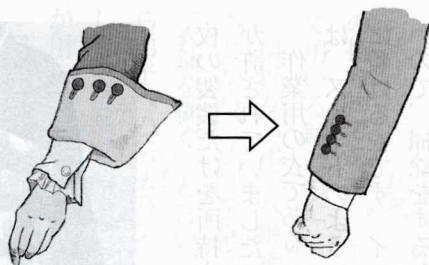
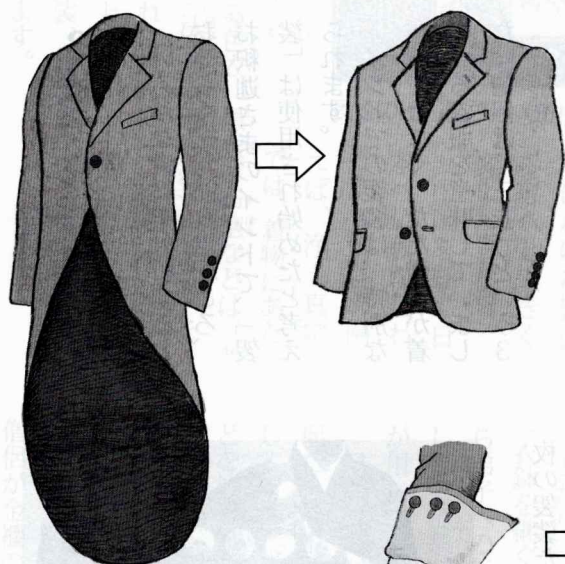
時を経て、このフロック・コートが正装に格上げされ、日中の正装はフロック・コート、夜の正装はイブニング・コートというドレス・コードが、厳格に守られるようになっていきます。

この当時、食卓では、長い尾の付いた燕尾服を着ていたわけですが、食後、ソファアに腰掛けゆったり過ごすとき、

長い尾が邪魔になります。そこで、くつろぐための服として登場したのが、尾が切り取られた、丈の短い筒形のラウンジ・ジャケットです。そして、これこそが現代スーツの直接の先祖なのです。

厳格なドレス・コードがあった時代においては、このラウンジ・ジャケットは、現代のTシャツぐらいのカジュアルさだったのではないでしょう

現在のシングルの上着は前裾がカーブし、一番下のボタンを外して着用するが、そのように着たときのラインにモーニング・コートの前裾のラインの名残がみられる



スーツの袖口のボタンは、装飾的な貴族服の袖口の名残であり、古い時代へのオマージュ

うか。そして20世紀に入ると、カジュアルだったこのラウンジ・ジャケットが、微修正を重ねられ、上流階級の昼間の正装としても、堂々と通用するようになっていくのです。ここまでの話は、まだほんの一端でしかないのですが、スーツという服が、時代とともに変化し続けて今に至ることは、お分かりいただけたのではないかと思います。

使わないボタンが

面白いのは、時代や地域に応じて、さまざまに変化してきたにもかかわらず、いつだってスーツはスーツであり続けてきた、ということです。その理由は、連続性にあると私は考えています。スーツという服は、新しく変化しても、かつての服に対するオマージュ（敬意）が、必ず残されているからです。

たとえば、袖口のボタンです。「本切羽」といって実際に開け閉めできるものもありますが、最初から開け閉めできない仕様であっても、ボタンだけは付いています。基本的に使わないことを前提にしている箇所にボタンを残しているのは、おそらく、貴族服から続く伝統に連なっていることを証明するためなんです。他にも、シングル・ジャケットの前裾のカーブと一番下のボタン開けはモーニング・コートへの、ポケットのフラップ（雨ふた）はポケットに雨水を入れないようにしたカントリージャケットへの

、ズボンのフオプ・ポケットは懐中時計を入れていた時代の服への、下襟のフラワー・ホールは第一ボタンをはずして襟元を左右に開いた軍服への、それぞれのオマージュであると解釈できます。必要性や機能性だけではない必要であろう部分をあえて残すのは、伝統への敬意からなのです。

この歴史や伝統に対する敬意が、スーツという服に特有の信頼感を与えているのだと思います。それゆえに、現代日本でも、大事な場面を着る服といえばやはりスーツであり、G7サミット（先進7カ国首脳会議）などでも、男性の首脳はみんな、スーツ姿なのでしよう。

変化に対する可塑性を持ちつつ、決して伝統への敬意を失わないからこそ、スーツは今もスーツなのです。思えば長く続くものって、みんなそうかもしれないですね。（談）

中野さん著『「イノベーター」で読むアパレル全史 増補改訂版』（日本実業出版社）発売中。